

学びの風便り

リーディングスクール通信 29 R6.9.30

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

特集！学びの改革のあゆみ 開成中学校・丸ノ内中学校

開成中学校



「こういうことをやりたい」「こういう自分になりたい」が実現する学校を目指し、本年度はいよいよ本丸「総合的な学習の時間」の改革に着手し始めた開成中学校。令和6年度も後半を迎え、試行錯誤の中で苦しみながら、それでも前に進み続けている開成中学校の様子をご紹介します！

探究的な学びの実現はなぜ難しいのか

2学期がスタートし、実りの秋に向かって進み始めた9月2日。信州大学准教授 荒井英治郎先生をお招きして、職員研修が行われました。リーディングスクールの指定を受け、昨年度より探究的な学びを進めてきた開成中学校が荒井先生をお招きするので、タイトルは当然「探究的な学びを進めていくためにはどうしたら良いか」といったものだと思います。本記事の見出しの通り「探究的な学びの実現はなぜ難しいのか」という斬新なものでした。ただ、荒井先生がこのタイトルにされた理由は「そもそも難しいということを受け入れた上で『どうしていけばいいのか』と考えた方が、思考はスムーズに流れる」という、いたってシンプルかつ合理的なものでした。



本研修の後半、自分の探究的な学びへの立ち位置を1～10（数字が大きいほど探究的な学びへの積極性が高い）の数字で表してグループ毎合計しましたが、平均を出してみると、どのグループも4点台（最高で4.7）でした。リーディングスクールの指定を受けて2年目の開成中学校。着実に歩みを進めているとは言え、探究的な学びへの距離感は職員によってまちまちだということがわかります。この時期にもう一度「なぜ難しいのか」から見つめ直すことは、一見遠回りに見えて、実は次の大きな歩みに繋がる可能性を感じる貴重な機会だと思いました。

「0」から「1」を作り出す苦しみと喜び！

各学年で総合的な学習の時間を中心になって進めている先生方にお話を伺う機会を得ました。3名の先生方はともに、これまで行事総合だった総合を大きく変えていく過程で様々な苦労されていることがわかりました。まさに「0」から「1」を生み出そうとするがゆえに出てくる課題であり、やらなければ課題さえ出てこないわけで、大変ポジティブな苦しみだと言えます。

先生方は何が課題なのか明確にお持ちだったので、荒井先生から具体的なご示唆をいくつかいただきました。ここでも大事になってくるのは「問いの重要性」です。到達点と通過点を意識し、活動後のリフレクションで、次の活動に繋がる問いを用意することで、1つ1つの活動が繋がっていく。お話を聞く3名のお若い先生方の表情が明るかったのが印象的でした。今後の開成中から目が離せません！



丸ノ内中学校では、「自ら問いを立て、課題解決能力を育む」ことを目指し、探究学習に力を入れています。パイオニア校として2年目を迎え、「生徒の探究的な学びをどのように支えるか」という課題意識に立ち、軽井沢風越学園と連携しながら、「職員研修」を中核におき、「探究の学び」の充実に向けた様々な取り組みを行ってきました。

昨年度は、探究的な学びの支援に対して不安に思っていた先生が多かったため、先生方が互いに「不安」を安心して話し合える場をつくるとともに、生徒の探究を支援できるよう、データサイエンス、デジタルポートフォリオ（DP）、チューニングなど、教員のスキルアップに取り組んできました。さらに今年度は、「教師自身が探究的な活動を体験することで、子どもの困り感やつまずきやすい点、効果的な支援方法などを、自ら身をもって理解する」ことをめざし、教師自身が探究活動を行う「職員探究」を職員研修に位置付けています。

先生方の興味関心からつくられた職員探究のテーマは多岐にわたります。例えば、「松本市の銭湯の活性化」や「マイナースポーツの普及」などを掲げて活発に活動しています。所属学年や経験年数を問わず、意見交換を行い、新たな気づきを得る場面も少なくありません。職員探究は月に1回以上、年間暦の中に位置づけたり、月曜日と水曜日の清掃を無くして放課後の時間を確保したりし実施し、地域での体験やExcelを活用した統計、スライドを活用したDPの作成、研修の企画等、主体的に活動してきました。



実は、丸ノ内中の先生方は探究活動の楽しさと共に難しさも深く感じています。丸ノ内中学校では「1日忠恕」として、生徒が終日、探究活動を行う時間を設けていますが、計画をしっかりと立てたり、問いを深めたりすることが十分に行われず、生徒の活動が「体験」でとどまっている場面もあるといいます。古旗教頭先生は、「小学校では体験的な学びから始まり、高校では問いを深める学びへと移行していく。中学校はその過渡期であるが、体験が充実するとそこで満足してしまい、目的である『どんな力がついたか』が見えなくなってしまう怖さがある」と課題を感じています。

そこで、生徒が学習の見通しや問いを明確にする支援をするために、先生方が各教科での学びがどのように位置づいているかという教科等横断的な視点をもつことや、単元配列の組み換え等のカリキュラム・マネジメントの充実を図りつつ、丸ノ内中学校では探究学習のフレームワークを作成しています。職員探究では、このフレームワークを先生たち自身が活用し、その良さを身をもって学んでいます。（詳しくは、信濃教育第1654号PPDACメソッドを核とした探究学習の方途でご確認ください。）

教師の学びと生徒の学びは、相似形と言われます。このように丸ノ内中学校では、教師が自ら探究活動を行うことで、生徒の主体的な探究活動をより効果的に支援することをめざしています。教師が探究者としての様々な体験を積み重ねる中で、生徒の学びはさらに深まり、多様な可能性へと繋がっていくことでしょう。丸ノ内中学校のシンカが続きます。

お知らせ

★各校の取り組み状況を随時松本市教育委員会のホームページでお知らせしています。
（毎週更新） 右のQRコードからぜひご覧ください。

